

# 西尾市岩瀬文庫蔵延慶二年識語本『和漢朗詠集』の漢字音 — 専修大学図書館蔵本との比較を通じて —

Sino-Japanese Phonetic Glosses in the Iwase Bunko Library's *Wakan Roeishu*  
in Comparison with Senshu University Library's Collection

加藤 大鶴

KATO Daikaku

## 要 旨

『和漢朗詠集』鎌倉期加點本は漢字音研究にほとんど使用されていない。昨年専修大学図書館蔵本（専図本）について行った分析に引き続き、本稿では岩瀬文庫蔵延慶二年識語本（岩延本）の漢字音について仮名音形と声点についての分析を行った。また専修大学図書館蔵本との比較を行い、その位置づけを考察した。結論としては、専図本と同様に、呉音読み漢語を交える点、連濁例を交える点、1拍去声字の上声化を交える点などから、日本語化を経ていることが確認される。その特徴は、漢語としての発音が指向され、音調実現に日本語の拍数が影響を与えてはいるが、日本語アクセント体系に融和しきるような1語としての単位的結合までには及んでいない、と総括される。

さらに岩延本におけるこうした結果は、専図本の傾向に極めて近い。専図本は菅家の家説を反映しているが、先行研究が指摘するように、岩延本の本文は菅家のものに近い。すなわち岩延本の字音点が菅家の家説と関わりを持つことを示唆する。また局所的に現れる濁声点「-o」は識語にある藤原南家秘本からの移点と考えられ両本からの影響を受けた漢字音であると考察された。

## 1 はじめに

鎌倉時代における和化漢文訓読資料の漢字音を知るための文献の一つに、『和漢朗詠集』がある。平安期以来貴族を中心とした層に口誦・朗詠された漢詩は、中世に至れば幼童の教科書としても用いられたほか、博士家では学問の対象としても学ばれたという（川口久雄 1965、菅野禮行 1999）。すなわちその受容の裾野の広さから、漢字音研究のみならず日本語史研究に資するところが大きいと考えられるが、系統関係がほぼ未整理のままに夥しい写本群が存在するために、資料的価値を論ずる前段の部分で足踏みをせざるを得ない状況が今も続いている。写本群を整理しようと試みた研究には、主として平安鎌倉期の写本を扱った伊藤壽一・鹿嶋正二 1939 が夙にあり、書誌、奥書および諸本間の

異同から系統を考える手がかりとなる。また近年では平安時代書写である古筆切れの系統関係を論じた山本まり子 2017 もある。

一方訓点を豊富に有する鎌倉時代の写本についてはほぼ手つかずと言ってよい状況にある。鎌倉時代以前の古点本の漢籍と『和漢朗詠集』の訓点を比較した小林芳規 1967:1321-1330 では、大江家、藤原南家、式家、菅原家の家説があった『和漢朗詠集』の訓点の実際が明らかにされたが、漢字音についてはほぼ触れられていない。鎌倉期書写・加点本における『和漢朗詠集』の漢字音の調査自体、ほとんど行われていない次第である。加藤大鶴 2022 では西崎亨 1987 において調査されていた専修大学図書館蔵本（上帖 1251 年加点・下帖 1238 年加点か）の再検証を行い、菅原家による『和漢朗詠集』鎌倉期加点本的一端を明らかにした。そこで得られた結論の概略を下記に示す。

1. 声点は漢音に基づく五声体系（平声軽点は認められるが入声軽点は認めがたい）が主体であり、呉音も交える。
2. 濁声点（双点）は次濁字に多く、これは漢音の特徴を反映している。全濁字にも比較的多いが、これは呉音の反映とみられる。
3. 漢音と呉音に限らず、連濁例が観察される。ともに鼻音韻尾字に後接する場合に著しい。
4. 『広韻』去声字・上声全濁字のうち 1 拍のものは上声化傾向にある。
5. 上昇調+上昇調（去声字+去声字等）、高平調+上昇調（上声字+去声字等）の組み合わせに現れる中低形は本資料ではほぼ回避されていない。

本稿で取り上げる西尾市岩瀬文庫蔵延慶二年識語本（以下、岩延本と称す）は『和漢朗詠集』鎌倉期写本としてしばしば言及されることのある一本である。その識語から藤原南家の秘本とされながらも、本文からは菅原家の伝本に近いことが指摘されてきた本資料は、漢字音の面ではどのような性質を有するのか、まだ分かっていない。そこで本稿では本資料の原本調査（函番号：卯-74）によって漢字音を分析し、その特徴を明らかにするとともに、菅原家による加点と判明している専修大学図書館蔵本（以下、専図本と称す）との比較を行い、『和漢朗詠集』を用いた漢字音研究の基礎を固めることとする。

## 2 瀬文庫蔵延慶二年識語本について

岩瀬文庫には鎌倉期写本とされる『和漢朗詠集』が 2 本あり、そのうちの 1 本が本稿で報告する延慶二年識語本である\*<sup>1</sup>。胡蝶装で上下二冊が揃っており、上下冊末尾に識語を有している。以下に上冊の識語を示す（改行は」で示した）。

\*<sup>1</sup> もう 1 本は弘安三年の識語を持つもので、上巻のみの卷子本である。

本云 仁治三年九月四日子尅以越前\*<sup>2</sup>入道孝自筆御本」於燈下走筆了可謂証本歟可秘藏之云々」延慶第二之曆沽洗三八之良曜於北京之旅宿」賜南家之秘本終書功了 重又所移点」而已  
 先年京\*<sup>3</sup>家読合 奥書在別紙

この識語については伊藤壽一・鹿嶋正二 1939 に言及がある。これによれば、まず上下冊の識語に誤写と思しき揺れがある（注に示した）ことから、延慶二年（1309）書写の原本ではないとされるが、書写年代は原本とそう遠くないと見込まれている。越前入道とは藤原南家の文章博士藤原孝範のことというから、南家に伝わる秘本を書写したと読めるが、伊藤・鹿嶋は別系統の写本に存する南家のものとされる注と比較するに、本文は菅家伝本に近く、校合の際に参照した南家秘本の奥書を転載したものかと考えられている。本文中には「江本不載」\*<sup>4</sup>の記述もあり、加点・移点のどの段階か判然としないが、他の鎌倉期写本と同様に複数の家説を参照したと思しき痕跡もある。ともあれ、加点の根拠は識語の内容からすると、仁治三年（1242）の孝範自筆による「御本」の何を参照したかが問題となるが、これは今後の課題となろう。

さて岩延本は朱筆の訓点のほか、墨筆の傍訓、字音仮名音注、声点が施されているが、墨筆のものには伊藤・鹿嶋が述べるように後代に加筆されたかと思われるものも多い。実際に、仮名音注には別筆と目されるものが存するほか、声点にも二筆と一筆のものが交ざっているようにも見られ、濁声点にも双点「oo」「( )」の形状や「-o」等のものがある。先述の「何を参照したか」という問題はこうした複数の字音注記の評価と関わって来ようが、すべての字音注記の移点・加点を分類することは難しい。本稿ではそこで、各種注記の形態が峻別できるものは峻別し、また菅家の訓点を有すると考えられている専図本との比較も必要に応じて行い、可能なかぎりその位置づけを捉えたい。以上を踏まえ、次節以降ではまず仮名音形の分析を行い、次に漢字音の声点の分析を行うこととする\*<sup>5</sup>。

### 3 仮名音形について

岩延本に現れる字音仮名音注のある被注字は全例で 1533 例ある。専図本とした場合に、共通する被注字は 1419 例、岩延本にのみ現れるものは 103 例、専図本にのみ現れるものは 105 例であった。また 1 字に複数の仮名音注がある字は 45 例あり、そのような場合の多くは本文の右傍と左傍の両方に注記が加えられており、書体・字体から左傍に後代と思しき注記が多く見受けられた。

\*<sup>2</sup> 下冊識語は「越前入道」が「故越前入道」となっている。

\*<sup>3</sup> 下冊識語は「京」が「二品」となっている。

\*<sup>4</sup> 下冊「松」部 [2-05b1] 欄外脚注。

\*<sup>5</sup> 分析の枠組みは加藤大鶴 2022 に倣うため、各項目における説明には重複を避けた部分もあることをお断りしておく。

以下、字音注記中の仮名音形の分析にあたっては、書体・字体から後代の別筆によると考えられるものを除いた。また左傍に注記されるものは後の書入れであるものが多いと推測されるので、これも除いた。以上の手続きを経ると 1334 例が分析の対象となる\*<sup>6</sup>。

### 3.1 m 韻尾字と n 韻尾字

規範的な日本漢字音では、m 韻尾字（深摂・咸摂、唇内韻尾字）は「ム」、n 韻尾字（山摂・臻摂、舌内韻尾字）は「ン」となる。これらは平安期には区別を保ったが、院政鎌倉期には違例が現れ、鎌倉期には区別が消滅するとされる（沼本克明 1986）。『蒙求』諸本では鎌倉中期から後期にかけて区別が失われ（佐々木勇 2009:124）、13 世紀書写の論語古写本では書き分けが失われた結果「ン」表記に合流する（石山裕慈 2008）という。13 世紀加点とみられる専図本でも同様の傾向が見られるが、本資料でも表 1 に見るように、同じ傾向が確認される。

	—ム	—ン	合計
m 韻尾字	39	31	70
n 韻尾字	86	103	189
合計	125	134	259

表 1 岩延本：m・n 韻尾字の現れ方

### 3.2 ㊥ウ韻字と㊦ヨウ韻字

規範的な日本漢字音\*<sup>7</sup>では、效摂蕭・宵韻は㊥ウ、通摂鍾韻、曾摂蒸韻は㊦ヨウ（ヨウ）となることが知られる（沼本克明 1986）。このうち㊥ウと㊦ヨウ（ヨウ）はいずれも拗長音の [jo:] に合流し、院政期から表記としても混乱するに至るといふ。『蒙求』写本群では鎌倉時代中期以降から混乱が増加するというが（佐々木勇 2009:116-120）、14 世紀に書写されたという醍醐寺本『本朝文粹』では多少の混乱を含みながら概ね規範的な区別を保っており（石山裕慈 2009）、漢字音学習の伝承や規範的な態度に異なりがあったことによると考えられる。

本資料では表 2 に見るように、概ね区別を保っていると言える。専図本では規範的ではない仮名音形が各韻でそれぞれ 2～3 割現れたことと比較すると、ずっと規範的な様相を呈していると言える。下記に具体例の一部を示す。非規範的な表記のいくつかは専図本にも同例がある。

	㊥ウ表記	㊦ヨウ表記	合計
㊥ウ韻字	32	2	34
㊦ヨウ韻字	4	34	34
合計	36	32	68

表 2 岩延本：㊥ウ韻字と㊦ヨウ韻字の現れ方

\*<sup>6</sup> なお用例を掲げる際には [1-16a1] の形で出典を示す。最初の 1 桁の数字は上冊が 1、下冊が 2 であること、次の 2 桁の数字は丁数、表裏が ab、末尾の数字は行数を表す。なお専図本の用例を示す場合には [専 1-16a1] などと示す。

\*<sup>7</sup> 以下では所属韻を示す際に平声字をもって代表させる。

## ■㊦ウ韻字（效撰蕭・宵韻）

「㊦ウ」表記：<sup>セウ</sup>瀟 [1-20b3] <sup>レウ</sup>蓼 [1-22a4] <sup>ヘウ</sup>杪 [2-12b3] <sup>テウ</sup>調 [2-39a3] <sup>エウ</sup>杳 [2-47b5] <sup>セウ</sup>悄 [2-48a2] …  
 「㊦ヨウ」表記：<sup>リョウ</sup>繚 [1-04b5]、<sup>ショウ</sup>詔 [1-18a2]（<sup>ショウ</sup>詔 [専 1-16a1]）

## ■㊧ヨウ韻字（通撰鍾韻、曾撰蒸韻）

「㊧ヨウ」表記：<sup>リョウ</sup>陵 [1-09b2] <sup>ショウ</sup>茸 [1-18b2] <sup>チョウ</sup>澄 [1-29a5] <sup>ショウ</sup>乘 [2-02b1] <sup>リョウ</sup>隴 [2-36b4] <sup>ヨウ</sup>勇 [2-36b6] …  
 「㊦ウ」表記：<sup>テウ</sup>濃 [1-16a5]（<sup>チョウ</sup>濃 [専 1-14a4]）、<sup>テウ</sup>濃 [専 1-11b3] も）<sup>セウ</sup>鐘 [1-28b3] <sup>テウ</sup>籠 [2-34a5]  
 （<sup>テウ</sup>籠 [専 2-34a3]）<sup>テウ</sup>澄 [2-50a2]（<sup>テウ</sup>澄 [専 2-51b5]）

## 3.3 ㊦ウ韻字

規範的な日本漢字音での漢音では、遇撰虞韻、流撰尤・幽韻は㊦ウとなることが知られる。㊦ウ韻と㊦ヨウ韻は拗長音化のもとに合流するが、そこに合流するまた一つの道筋に南北朝期に生じたとされる㊦ウから㊦ユウの変化がある（沼本克明 1986:255-256）。いま㊦ウ形となる流撰尤・幽韻についてその現れ方を見ると、㊦ウ表記がほとんどであり㊦ユウは1例もないことが分かる（表3）。専図本には1例のみゼロ子音字に㊦ユウ表記が現れるが、全体としてみれば同様の傾向であると言える。なお、㊦ウと㊦ユ表記には鎌倉期においても若干揺れが現れるとされるが、本資料にもシユ収 [1-18a2]（シユ収 [専 1-16a1]）、シユ讎 [2-42a6]（シユ讎 [専 2-44a3]）の2例のみが確認され、うち1字は専図本と同例となる。

	㊦ウ表記	㊦ユ表記	㊦ユウ表記	合計
㊦ウ韻字	43	2	0	45

表3 岩延本：㊦ウ韻（流撰尤・幽韻）字の現れ方

## ■㊨ウ韻（流撰尤・幽韻）

<sup>イウ</sup>優 [1-37a4] <sup>シウ</sup>愁 [1-41a3] <sup>イウ</sup>遊 [2-04b1] <sup>キウ</sup>丘 [2-12a1] <sup>リウ</sup>劉 [2-13a6] <sup>キウ</sup>朽 [2-38b1] …

## 3.4 カ行合拗音

牙喉音における合拗音すなわちカ行合拗音字についても取り上げる。規範的な日本漢字音ではこれについては「クワ」「クキ」「クエ」などが現れるが、このうち「クキ」「クエ」は院政末期ごろから消滅し始め鎌倉時代後期になると直音「キ」「ケ」にはほぼ統一されると言う（沼本克明 1986:257-258）。「クキ」「クエ」については『蒙求』写本群において鎌倉時代後期から直音表記が多くなるとされる（佐々木勇 2009:110-113）。

本資料においては、まず「クワ」は当然ながら多数現れる。「クキ」は8例、「クエ」は15例現れた。狂<sup>キヤウ</sup> [1-17a4] は右傍仮名音注のさらに右傍に「クキウ」を注記したもので、専図本では「キヤウ」である。興<sup>クキョウ</sup> [1-44b1] といった中国語原音をより忠実に表そうとした表記もある。「クキ」「クエ」表記のうち、専図本にも仮名音注が存する例を以下に取り上げる。同時代的な傾向を有しつつも、専図本にのみ直音形となる例もあり（下線を付す）、本資料のほうが規範的であると言える。

■ 「クキー」

<sup>キヤウ/キヤウ</sup> 狂 [1-17a4] (<sup>キヤウ</sup> 狂 [専 1-15a3]) <sup>クキツ</sup> 橘 [1-21b5] (<sup>キム</sup> 橘 [専 1-19b3]) <sup>クキン</sup> 郡 [2-13a3] (<sup>クキン</sup> 郡 [専 2-13a3]) <sup>クキン</sup> 郡 [2-32b2] (<sup>クキン</sup> 郡 [専 2-32b1]) <sup>クキ</sup> 危 [2-32b3] (<sup>クキ</sup> 危 [専 2-32b2])

■ 「クエー」

<sup>クエン</sup> 勸 [1-07b2] (<sup>ケン</sup> 勸 [1-05b3]) <sup>クエン</sup> 願 [1-26a6] (<sup>クエム</sup> 願 [1-24a1]) <sup>クエイ</sup> 蕙 [1-32b3] (<sup>ケイ</sup> 蕙 [1-30a5]) <sup>クエン</sup> 源 [2-14a3] (<sup>ケン</sup> 源 [専 2-14a4]) <sup>クエツ</sup> 闕 [2-17a4] (<sup>クエツ</sup> 闕 [2 専 -17a5]) <sup>クエイ</sup> 蕙 [2-28a6] (<sup>クエイ</sup> 蕙 [専 2-28a5]) <sup>クエム</sup> 喧 [2-28b3] (<sup>クエム</sup> 喧 [専 2-28b2]) <sup>クエン</sup> 卷 [2-32a6] (<sup>クエン</sup> 卷 [専 2-32a4]) <sup>クエイ</sup> 惠 [2-41b4] (<sup>クエイ</sup> 惠 [専 2-43b1]) <sup>クエツ</sup> 闕 [2-46a6] (<sup>クエツ</sup> 闕 [専 2-48a4])

3.5 唇内入声韻尾字

唇内入声韻尾 (-p) 字は中国語原音では内破音だが日本漢字音では平安後期には両唇摩擦音 (-p > -Fu) で発音されるようになり、さらには日本語に生じた所謂ハ行転呼音によって 1000 年頃を境にウで発音されるようになる (沼本克明 1986:231-232)。専図本では多くが「ーウ」表記を取っていた。本資料において仮名音注が付される唇内入声韻尾字は、専図本にも概ね仮名音注が付される。

そこで両本を対照させ、対応関係を見ようとしたのが表 4 である。こうして見ると、岩延本では全体の約半数が規範的な「ーフ」表記であるが、それらは専図本では大多数が「ウ」表記となっている。また岩延本で「ウ」表記であるものの全てが

岩\専	ーフ	ーウ	ーツ	ーン	合計
ーフ	3	8			11
ーウ		11			11
ーツ		1	2	1	4
ーン			1	1	1

表 4 岩延本・専図本：唇内入声字の現れ方

「ウ」表記であることも分かる。総じて、岩延本の方が規範的であることがここでも確認される。

なお、唇内入声韻尾は無声子音が後続する環境では促音化しやすかったと考えられている (小松英雄 1956) が、ここに現れる岩延本の「ツ」表記の実例を専図本と合わせて下記に示す。まず、促音表記を「ツ」としたものに、<sup>セツ</sup>「接シテ」[2-13b1] (<sup>セツ</sup>「接シ」[専 2-13b2]) がある。後続するサ変動詞の影響で促音化した例であろう。

促音の表記を「ツ」とするか「ン」とするかには専図本において揺れがみられるが、岩延本で「ツ」専図本で「ン」となるものが<sup>セイサツ</sup>「蕭颯タル」[1-25b2] (<sup>セイサン</sup>「蕭颯タル」[専 1-23a3]) である。「<sup>カン</sup>「<sup>ホ</sup>浦ニハ」[1-30b5] (<sup>カン</sup>「<sup>ホ</sup>浦ニハ」[専 1-28a6]) の例もあり、類した事例とみられよう。

また、岩延本で促音表記「ツ」、専図本ではハ行転呼音による「ウ」となるものに、「<sup>カツシ</sup>「<sup>カウシ</sup>罍子ヲ」[2-32a1] (<sup>カウシ</sup>「罍子ヲ」[専 2-31b6]) がある。

3.6 仮名音形についてのまとめ

ここまで岩延本の仮名音形の特徴を専図本と比較しながら見てきた。その結果、(1) 鎌倉期に区別



が消滅するとされる m 韻尾・n 韻尾の書き分けは完全に混乱している、(2) 鎌倉時代中期から混乱が増加するとされる㊦ウ韻と㊧ヨウ韻の書き分けについてはよく保存されている、(3) ㊨ウ韻は㊨ウ表記はよく保存され南北朝期に生ずる㊩ユウへの合流はほぼ見られない、(4) カ行合拗音は「クワ」表記はもちろんのこと鎌倉後期に直音化する「クキ」「クエ」も保存されている、(5) 唇内入声韻尾は「フ」表記を半数程度保持しながら一部は -p > -Fu > -u を経て「ウ」表記、無声子音が後続する場合の促音化を経て「ン」表記や「ツ」表記となる、ということが確認された。以上から岩延本の字音仮名音形は少なくとも鎌倉時代前期ごろの様相を反映するとみられる。

また専図本との比較を通じて、字音についての共通基盤を有しながらも、専図本よりも規範的な仮名音形が見られることから、より古い時代の音を反映するのではないかということも考えられた。

こうした特徴からすると、岩延本に反映する仮名音形は専図本に反映する 13 世紀前半よりも古いと考えられ、識語に示される書写年代延慶二年 (1309) はもちろんのこと、祖本の加点年代である仁治三年 (1242) 以前を反映すると見るべきであろう。

#### 4 声点の認定と体系

朗詠譜本の一つである『朗詠要抄』(天理大学図書館蔵本)の『和漢朗詠集』773 番「嘉辰令月歡無極 万歳千秋樂未央」などが漢音によって直読されたことから、朗詠は漢音直読の形態から次第に訓読の形態に移行していったと考えられている(川口久雄 1965 他)。専図本『和漢朗詠集』の分析からも、仮名音形・声点とも基本は漢音で読まれたことが確認できている。いま専図本の分析と同様に、『広韻』の枠組みに従って声点を分類したものが表 5 である。A が平声点、B が上声点、C が去声点、D が入声点であることは明らかである。

		A	a	B	C	D	d	計
平声	全清	456	227	33	49	0	0	765
	次清	179	66	8	13	0	0	266
	清濁	496	14	13	12	0	0	535
	全濁	461	19	24	19	2	0	525
上声	全清	4	0	175	6	0	0	185
	次清	2	0	64	6	0	0	72
	清濁	13	0	216	10	0	0	239
	全濁	6	0	15	46	0	0	67
去声	全清	23	3	30	175	1	0	232
	次清	4	3	7	76	0	0	90
	清濁	12	0	21	152	0	0	185
	全濁	27	2	11	168	0	0	208
入声	全清	0	0	0	0	144	40	184
	次清	0	0	0	0	39	15	54
	清濁	1	0	0	0	126	38	165
	全濁	2	0	0	0	65	31	98
計		1686	334	617	732	377	124	3870

表 5 岩延本：声点と広韻との対応表

a 点は平声全清・次清字で 28% (293/1031 例) であり、平声軽点と認められる。d 点は全濁音以外に対応するというが、岩延本ではほぼ区別がない。D 点と d 点は加點祖本において合流していたか、あるいは音調把握がないままに移点されたかであろう。上声全濁字はいわゆる「上声全濁字の去声化」を反映し、C 点とよく対応する。以上から、本資料における漢字音の声点は日本漢音に典型的な五声体系（平声にのみ軽重を分かつ）を色濃く反映していると言える。なお専図本でも全体としてほぼ同じ傾向を持つ。

岩延本の全ての被差声字のうち、専図本と重複するのは約 84% にのぼる 3258 字である。岩延本にのみあるのは 391 字、専図本にのみあるのは 430 字であった。両本とも広韻との対応関係を見れば、基本的には同じ傾向を有しているが、一致しないものもある。その詳細を表 6 に示す\*<sup>8</sup>。両本では同字に対して 8～9 割同じ声点を差していることがまず確認される（平声軽に関連する部分を除く）。違いがやや目立つのが、両本間で去声上声（上声去声）の関係にある、4～9% の部分である。さらには、岩延本で去声だが専図本で平声という部分もやや目立つ。次節以降ではこうしたずれの具体例に言及しながら、その要因についても考察を進める。

岩\専	平	軽	上	去	入	合計
平	1198 (83)	169 (12)	29 (2)	34 (2)	5 (0)	1435 (99)
軽	110 (37)	170 (58)	6 (2)	8 (3)	0 (0)	294 (100)
上	23 (4)	7 (1)	462 (85)	51 (9)	0 (0)	543 (99)
去	28 (4)	3 (0)	36 (6)	569 (89)	0 (0)	636 (99)
入	3 (1)	0 (0)	1 (0)		421 (99)	425 (100)
合計	1362	349	534	662	426	3333

表 6 声点の対応関係：岩延本と専図本

#### 4.1 同字に対する複数の声点について

基本的に声点は 1 字に対して 1 つ差されるが、複数の声点が差される場合もある。同字に複数の声点が差されるのは、当該の字または漢語が複数の音調（声調またはアクセント）を有する場合であろう。具体的には、韻書に複数の声調が確認できる場合や、漢音と呉音で声調を変える場合、あるいは漢語としての一体性のもとで単字の声調・アクセントが変化する場合、と考えられる。

\*<sup>8</sup> なお 1 字に複数の声点が差される場合があるので、表ではその声点を含むかどうかを取り上げている。また入声字については軽重を区別せずまとめて表示している。軽とあるのは平声軽点である。上段が延べ数、下段（ ）には岩延本の声点に対する専図本の対応率を%を示しているが、%は小数点以下を四捨五入しているために用例はあっても 0 となっているところがある。



一方、注記を加点する行為から見れば、異なる複数の説を併記する場合、あるいは異なる加点者が別の説を示そうとする場合等が考えられよう。例えば、「屏(平/去濁)風(上)」[2-34b1]の第1字には平声点と合点があり、合点者によって韻書全濁平声・漢音ヘイという読むべきことが示されている。専図本ではこの部分は去声濁点のみであり、岩延本の平声点とは異なることが確認される。合点のある声点は岩延本ではもう一箇所だけ、「常(上/去濁)-樂(入(ノ))」[2-33b2]の第1字の上声点と合点が付される例がある。この例も専図本では去声濁点のみである。

岩延本で特徴的なのは、同字に複数の声点のある場合、一方が擦抹<sup>\*9</sup>によって消去される例が頻繁に見られることである。一般的に訓点等を消去する場合には所説の強い主張を示したものと推察される<sup>\*10</sup>。表7では、同字に複数の声点が差されるものの全例と擦抹を伴う例の数、および擦抹によって消去された声点がいずれであったかをまとめて示した。擦抹にて消去されていても元の声点が微かに読み取れるもの、あるいは声点はほとんど消えていても擦抹の位置が声点の存在を推測させるものを取り上げた。表からは37例のうち半数を超える20例が擦抹を伴うことが分かる。いま特に数が目立つ「平・去」と「上・去」を取り上げ、その具体例を見てみる。用例中、複数の声点のうち「\*」を付すものは擦抹で消去されたものを表す。

声点	全例	含擦抹	消去された声点
平・東	3	0	
平・上	4	2	上声点2
平・去	14	11	平声点4、去声点7
平・入	3	0	
東・去	4	1	東声点1
上・去	9	6	去声点6
合計	37	20	

表7 岩延本：同字に対する複数声点例と擦抹例

#### ■平・去（14例中、平声点を擦抹4例、去声点を擦抹7例）

以下の各用例について、擦抹を伴う例の全てに経緯を探ることは難しいが、いくつかは説明が可能である。例えば、5「座下」は韻書に従えば去+去が漢音形、平濁+平濁が呉音形を示したと考えられ、呉音形を取る。4「同類」も同様であろう。常に呉音形を取るわけでもないことは、9「上弦」が平濁+平ではなく漢音形の去+平を残すことから分かる。専図本との比較では、5「座下」では岩延本で呉音形であるに対し専図本で漢音形を取るもの、9「上弦」岩延本で漢音形であるに対し専図本で呉音形を取るものなど、一様に論じることはできない。加点の基盤がどのような家説の系統をなすかに関わりがあろう。後考を俟つこととし、ここでは実例を示すに留める。

<sup>\*9</sup> 宇都宮啓吾 2011 によれば、訓点の消去法として「擦抹（小刀等による削り消し）・水分による料紙表面の繊維の除去（その多くは唾液で紙面を濡らし、指で擦ることによって当該箇所の繊維を除去する）」等が示される。本資料の場合は表面を削り取ったように見えるので、擦抹と見なした。

<sup>\*10</sup> 宇都宮啓吾 2011 によれば、「訓点の併記は可能であるにも関わらずにそのような手段を採択せず、積極的に所用でない訓点を抹消しようとするところには、既存の訓読の排除と自らの所用のヲコト点や訓説の伝承という強い意図を看取できる」とする。

岩延本	専図本
1. <u>候</u> (平/*去) ヲ [専 1-03a1]	
2. 世 (去) - <u>事</u> (平濁/*去濁) [専 1-06b2]	
4. 同 (平/去) - <u>類</u> (平/去) (ヲ) [専 1-10b2]	
3. <u>同</u> (*平/去) - <u>類</u> (平/*去) (ヲ) [専 1-10b2]	
5. <u>座</u> (平濁/*去) - <u>下</u> (平濁/*去) (ノ) [1-22b2]	<u>座</u> (去) - <u>下</u> (去) - (ノ) - [専 1-20a5]
6. <u>座</u> (平濁/*去) - <u>下</u> (平濁/*去) (ノ) [1-22b2]	<u>座</u> (去) - <u>下</u> (去) - (ノ) - [専 1-20a5]
7. 宮 (*東/去) - <u>樹</u> (平濁/*去) [1-24a4]	<u>宮</u> (平) - <u>樹</u> (去) [専 1-21b5]
8. <u>漢</u> (平/去) - <u>武</u> (平濁) (ニ) [1-31b1]	<u>漢</u> (去) <u>武</u> (上濁) ニ [専 1-29a2]
9. <u>上</u> (去/*平濁) - <u>弦</u> (平) (ノ) [1-38a3]	<u>上</u> (平濁) - <u>弦</u> (上濁) [専 1-35b5]
10. <u>四</u> (平/*去) - <u>皓</u> (去) [1-43b1]	<u>四</u> (去) - <u>皓</u> (去) [専 1-42a2]
11. <u>群</u> (*平/去) - <u>山</u> (平/*上) (ニ) [1-44a1]	<u>群</u> (東) - <u>山</u> (上) (ニ) [専 1-42b2]
12. <u>千</u> (平/去) - <u>里</u> (ニ) [1-44a2]	<u>千</u> (平) - <u>里</u> (上) (ニ) [専 1-42b3]
13. <u>含</u> (平/去濁) - <u>元</u> (平濁) <u>殿</u> (去濁) ノ [2-17a6]	<u>含</u> (平濁) - <u>元</u> (平濁) - <u>殿</u> (去濁) (ノ) [専 2-17b1]
14. <u>屏</u> (平/去濁) <u>風</u> (上) [2-34b1] 平声点に合点	<u>屏</u> (去濁) - <u>風</u> (上濁) [専 2-34a4]

■上・去 (9例中、去声点を擦抹6例)

3は韻書では全清上声字、8は全濁平声字、その他はすべて去声字である。うち、4・6・7・9は1拍去声字の上声化を示したか。2・8は2拍去声字であるのに上声化しており、経緯は不明である\*<sup>11</sup>。専図本との比較では、岩延本で去声点を擦抹し上声点を残すのに対して、1と3を除く全てが専図本では去声点のみである。岩延本に去声を避ける傾向があると言えようか。

岩延本	専図本
1. <u>計</u> (上/*去) <u>會</u> (去) セシ [1-03a6]	
2. <u>變</u> (上/*去) スレハ [1-04a5]	<u>變</u> (去) スレハ [専 1-02b1]
3. <u>粉</u> (上/*去) [1-29a5]	
4. <u>獸</u> (上/*去) - <u>炭</u> (上/*去) ノ [1-43a1]	<u>獸</u> (去) - <u>炭</u> (去) ノ [専 1-41b2]
5. <u>獸</u> (上/*去) - <u>炭</u> (上/*去) ノ [1-43a1]	<u>獸</u> (去) - <u>炭</u> (去) ノ [専 1-41b2]
6. <u>衆</u> (上/去) - <u>狐</u> (平) ノ [1-44a6]	<u>衆</u> (去) - <u>狐</u> (平) 去 [専 1-43a1]
7. <u>霸</u> (上/*去) ヲ [1-45b1]	<u>霸</u> (去) (ヲ) ハ [専 1-44a2]
8. <u>常</u> (上/去濁) - <u>樂</u> (入) (ノ) [2-33b2]	<u>常</u> (去濁) <u>樂</u> (入) (ノ) [専 2-33a5]
9. <u>往</u> (上) - <u>事</u> (上/去) [2-43b2]	<u>往</u> (上) - <u>事</u> (去) [専 2-45a5]

\*<sup>11</sup> こうした1拍上声非全濁字が去声化することについては、過修正 (hyper-correction) の可能性も指摘される (石山裕慈 2014)。

岩延本	専図本
1. 雌 <small>シ</small> (去) - 黄 <small>ワウ</small> (上)(ヲ) [専 1-15b6]	雌 <small>シ</small> (平) - 黄 <small>ワウ</small> (上)(ヲ) [1-18a1]
2. 慈 <small>シ</small> (去濁) - 恩 <small>オン</small> (上)ニ [専 1-16a5]	慈 <small>シ</small> (上濁) - 恩 <small>オン</small> (上)(ニ) [1-18a6]
3. 招 <small>シヨウ</small> (去) - 涼 <small>リヤウ</small> (上) [専 1-18b4]	招 <small>セウ</small> (平) - 涼 <small>リヤウ</small> (平)ノ [1-20b6]
4. 屏 <small>ヒヤウ</small> (去濁) 風 <small>フウ</small> (上濁)(ニ) [専 2-15a3]	屏 <small>ヒヤウ</small> (去濁) 風 <small>フウ</small> (上濁) [2-15a2]
5. 眞 <small>シン</small> (去) - 珠 <small>シュ</small> (上濁) [専 2-18b1]	眞 <small>シン</small> (平) - 珠 <small>シュ</small> (上濁) [2-18a6]
6. 赤 <small>シヤク</small> (入) 梅 <small>セム</small> (去) 檀 <small>タム</small> (上濁)(ヲ) [専 2-25a3]	赤 <small>シヤク</small> (入) - 梅 <small>セム</small> (去) - 檀 <small>タム</small> (上濁)(ヲ) [2-25a4]
7. 拔 <small>ハツ</small> (徳濁) - 提 <small>タイ</small> (去濁) 河 <small>カ</small> (上濁)ノ [専 2-25a4]	拔 <small>ハツ</small> (徳濁) - 提 <small>タイ</small> (去濁) - 河 <small>カ</small> (上濁)ノ [2-25a5]
8. 漬 <small>シヤウ</small> (去) - 涼 <small>リヤウ</small> (上)(ノ) [専 2-26a2]	清 <small>シヤウ</small> (去) - 涼 <small>リヤウ</small> (上)ノ [2-25b6]
9. 常 <small>シヤウ</small> (去濁) 樂 <small>ラク</small> (入)(ノ) [専 2-33a5]	常 <small>シヤウ</small> (上/去濁) - 樂 <small>ラク</small> (入)(ノ) [2-33b2]
10. 一 <small>イツ</small> (入) - 生 <small>シヤウ</small> (去)(ノ) [専 2-41b1]	一 <small>イツ</small> - 生 <small>シヤウ</small> (去)(ノ) [2-40b4]
11. 和 <small>ワ</small> (去) - 琴 <small>コン</small> (上濁) [専 2-42b2]	倭 <small>ハ</small> (上) - 琴 <small>コン</small> (上濁) [2-40b5]
12. 梅 <small>セム</small> (去) 檀 <small>タム</small> (上濁)(ノ) [専 2-50b6] 梅 <small>セム</small> (去)	檀 <small>タム</small> (上濁)(ノ) [2-49a3]
13. 詔 <small>シヨウ</small> (平濁) - 紙 <small>シ</small> (ニ) [専 1-16a1]	詔 <small>シヨウ</small> (平濁) - 紙 <small>シ</small> (ニ) [1-18a2]
14. 淨 <small>シヤウ</small> (平濁) - 侶 <small>リヨ</small> (上)(ハ) [専 2-27a2]	淨 <small>シヤウ</small> (平濁) - 侶 <small>リヨ</small> (上)ハ [2-27a3]
15. 詔 <small>セウ</small> (平濁) [専 2-40b3]	詔 <small>セウ</small> (平濁) [2-39b6]

#### 4.2 呉音の混入について

表5において、広韻にて平声でありながら去声点が差されるような対応に外れるものに、呉音の混入が考えられることは専図本について報告したとおりである(加藤大鶴 2022)。専図本において仮名音形と声点の両面から呉音形であると推定した例については、古辞書、和化漢文訓読資料等と同じ音形が確認されることから、呉音読み語彙として固定化していたのではないかと考えたのであった。いま「広韻で平声だが去声点が差される字を含む語」および「広韻で去声だが平声点が差される字を含む語」(当該字に下線)について専図本で呉音形と認定した例を取り上げ、岩延本と対照してみる(左列が専図本、右列が岩延本)。

専図本のうち網掛けをした部分は、招字が韻書全清平声、涼字が韻書次濁平声であるから漢音形と見られるが、この1例を除いて、同じ呉音形である。専図本に去声点が差される場合、岩延本に上声点が差される傾向にあることはすでに述べたとおりである。また去声+上声は平声+上声でも現れることがあり、低く始まり上昇する型の間の揺れとして解釈される\*<sup>12</sup>。専図本と岩延本における1「雌黄」、5「眞珠」はそれを反映するか。『和名抄』には「俗云之(平)王(上)」[京 5-25a]がある。以上から、字音注加点の基盤に語音としての共通の発音慣習があったと想像され、『和漢朗詠集』の発音が漢音学習を目的とした一面的な字音系統の採用ではないことが伺われるのである。

\*<sup>12</sup> こうした「低起上昇型」の間にはしばしば揺れが見られることがある(加藤大鶴 2015 他)。

岩延本	専図本
1. 談 (上濁) スル [2-23b6]	談 (平濁 / 上濁) スル [専 2-23b5] *上濁に合点
2. 重 (平) - 壘 (平濁) タル [2-26b3]	重 (平) 壘 (入濁) セル [専 2-26b2]
3. 人 (平濁) - 間 (平) (ノ) [2-28a4]	人 (去) - 間 (上濁) (ノ) [専 2-28a3]
4. 竹 (入) - 霧 (去濁) [1-40b1]	竹 (入) - 霧 (上濁) ハ [専 1-38a3]
5. 堂 (上 / 去濁) - 樂 (入) (ノ) [2-33b2] *上声点に合点、去声点 -o	堂 (去濁) 樂 (入) (ノ) [専 2-33a5]
6. 悵 (去) - 望 (上濁) ス [2-34b3]	悵 (平) - 望 (去濁) ス [専 2-34a6]
7. 五 (去濁) 湖 (平) (ニ) [2-44b3]	五 (上濁) 湖 (平) (ニ) [専 2-46a6]

### 4.3 濁声点について

まず、第2節で触れたように岩延本の濁声点には双圏点「oo」と「-o」との2つの形状がある。紀伝道の訓点では菅原家使用の濁音符に「oo」、藤原南家に「-o」が用いられるという（小林芳規 1967:1274-1277）。識語に見える藤原南家からの移点かと想像される経緯が、濁声点に現れている可能性がある。双圏点は438例、上下冊全編にわたって偏りなく現れる。「-o」は174例、ほとんどが下冊に、かつまとまった箇所集中して現れる傾向にある。こうした濁声点の分布からは、加点の基礎的資料となる本があり（菅家本か）、部分的に南家本を参照したという経緯が想像される。

専図本との比較では、そのほとんどの声点位置は一致するが、次の7例のみ異なる。2「壘」は唇内入声韻尾がハ行転呼を経て-uとなったものを平声点で捉えたもの、3「人」は岩延本が漢音形で専図本が呉音形を示したもの、4「霧」7「五」は岩延本が1拍去声字を高平化させない形を示したものであろう。いずれにしても南家によると見られる岩延本の濁声点「-o」には、菅家かと思える専図本と異なる差声が認められるのである。

さて、濁声点が差される漢字を『広韻』の枠組みに従って見ると、全清字は63/1354（5%）、次清字は14/477（3%）、次濁字は412/1122（37%）、全濁字は126/917（14%）であり、目立って次濁字が多い。これは言うまでもなく漢音読みが主体である本資料において、明母、微母、泥母、娘母、日母の各字が中国語原音における非鼻音化現象のためにバ・ダ・ザ行で現れること、また疑母がガ行で現れることを反映することによる。全濁字にも濁声点がやや目立つのは、呉音では全濁字は濁音で実現するとされることによる。こうした特徴は専図本でも確認されるのであり、程度の差はあれ漢音を中心的な読誦音とする『和漢朗詠集』諸本に通底するものであろう。

問題となるのは全清字、次清字でありながら濁声点が差される場合であるが、専図本では非語頭環境に目立って多く、しかも鼻音韻尾字に続く場合に多いことが確かめられている（加藤大鶴 2022）。岩延本でも、次濁字で語頭189字：非語頭223字、全濁字で語頭62字：非語頭64字であるに対し、

全清・次清字では語頭 16 字：非語頭 61 字となっており、全清・次清字では明らかに非語頭環境に偏りが大きい。漢語の連濁例は前接字が鼻音韻尾 (-m、-n、-ŋ) である場合に多いとされ (奥村三雄 1952)、それは呉音に著しいながらも漢音に生じることが知られる (沼本克明 1973)。そこで本資料の全清・次清字の非語頭例について、その前接字を 2 字漢語に限って調べると、夫<sup>フ</sup>-聾<sup>ソウ</sup> (去濁) [2-48a6] など零母音字 3 (7) 例、緱<sup>コウ</sup> (平) - 山 (平濁) ノ [2-10a2] など母音韻尾字 3 (4) 例、十 (入濁) - 分 (平濁) (ヲ) [1-31b4] ・p 韻尾字 1 (1) 例、南 (平) 山 (平濁) ノ [2-35b2] など m 韻尾字 13 (13) 例、人 (去) - 間 (上濁) (ノ) [2-34b5] など n 韻尾字 11 (15) 例、征 (平) - 戍<sup>シウ</sup> (去濁) ノ [1-31a1] など ŋ 韻尾字 22 (27) 例であって、多くが鼻音韻尾字であることが分かる (( ) 内の数字は専図本の用例数)。この点も専図本と同じである。

#### 4.4 1 拍去声字の上声化について

呉音と同様に、漢音においても去声字が 2 拍字では去声、1 拍字では上声に偏ることが佐々木勇 2009:562 で指摘される。これは去声字の上昇調が 2 拍字では安定し、安定が困難な 1 拍字では高平調に変化したことを反映すると考えられている。表 12 にみるように、広韻去声字の上声化は明らかに 1

広韻	環境	上声点		去声点		合計
		1 拍	2 拍	1 拍	2 拍	
去声字	語頭	29	12	77	222	340
	非語頭	19	8	57	215	299
全濁上声字	語頭	5	0	6	23	34
	非語頭	8	2	3	14	27
	合計	61	22	143	474	700

表 12 1 拍去声字の上声化の度合い

拍字に偏りがある。また語頭か非語頭かによって特に傾向に違いがないことも見て取れる。

試みに、両本の広韻去声字だけを抜き出し、上声点と去声点で現れたものを拍数ごとに出現率を算出してみる。岩延本では上声点が 1 拍字 = 8% : 2 拍字 = 3%、去声点が 1 拍字 21% : 2 拍字 68% となる。専図本では上声点が 1 拍字 7% : 2 拍字 2%、去声点が 1 拍字 19% : 2 拍字 71% となる。両本はほとんど同じ傾向を有しているということが分かる。

#### 4.5 中低形の回避について

上昇調 + 上昇調 (去声字または全濁上声字の接続)、高平調 + 上昇調 (上声字に後接する去声字または全濁上声字) 環境では、中低形を生じるために後項の音調を高平調または低平調に変化する現象が知られるが、漢音にも生じることが分かってきた (石山裕慈 2011、加藤大鶴 2019 他)。ただし

広韻	声点の組み合わせ				
	去+去	去+上	上+去	上+上	去+平
去+去	40	3	7	0	0
去+上	2	40	0	5	1
上+去	0	0	39	3	0
去+平	0	3	0	0	61
上+上	0	1	0	23	0

表 13 岩延本：中低形の回避

この現象が、どの時代のどの位相の漢音資料に生じるかは未だ十分に明らかとはなっていない。表 13 は、岩延本の 2 字漢語のうち中低形となる去声点+去声点、上声点+去声点、中低形が回避された可能性のある去声点+上声点、上声点+上声点、去声点+平声点の組み合わせを、それぞれ広韻における声調と対応させている。表中『広韻』の去は去声字に上声全濁字も代表させ、上声字には全濁字を含めていない。下線部は中低形となる組み合わせである。

網掛け部分に見るとおり『広韻』の声調と岩延本の声点はほとんど一致しており、中低形が回避されたとは考えられない。広韻で去+去のうち去声点+上声点となる 3 例（<sup>シ</sup>四（去）-<sup>シ</sup>時（上）[1-27b2]、<sup>カウ</sup>絳（去）-<sup>カム</sup>帳（上）[1-42b4]、<sup>コ</sup>澗（去）-<sup>コ</sup>戸（上）ニ、上+去のうち上声点+上声点の 3 例（鳥（上）-路（上）ハ [1-24a5]、<sup>テム</sup>旅（上）-<sup>テム</sup>店（上）[2-04b4]、往（上）-事（上/去）[2-43b2]）は、後項の去声字が上声化したものと見られようが、全体としては漢字音の日本語化の一現象である中低形回避が見られないという結果は、専図本と同じである。両資料における漢字音は、この点からすると 1 字ごとの独立性・規範性が高いということになる。

## 5 おわりに

以上、岩瀬文庫蔵延慶二年識語本の漢字音について仮名音形と声点についての分析を行い、適宜専修大学図書館蔵本との比較を行ってきた。分析を通じて得られた主な結果を下記にまとめる。

1. 仮名音形から鎌倉時代前期、専図本に反映する 13 世紀前半よりもやや古い様相が看取される。
2. 声点は漢音に基づく五声体系（平声軽点は認められるが入声軽点は認めがたい）が主体であり、広韻の分類における全濁上声字は多くが去声化する。語彙によっては呉音も混入する。
3. 岩延本の被差声漢字の約 84% が専図本に一致する。さらにその声点の 8～9 割は専図本に一致する。
4. 濁声点（双点）は次濁字に多く、これは漢音の特徴を反映している。全濁字にも比較的多いが、これは呉音の反映とみられる。
5. 漢音と呉音に限らず、連濁例が観察される。ともに鼻音韻尾字に後接する場合に著しい。
6. 『広韻』去声字・上声全濁字のうち 1 拍のものは上声化の傾向にある。
7. 上昇調+上昇調（去声字+去声字等）、高平調+上昇調（上声字+去声字等）の組み合わせに現れる中低形は本資料では回避されていない。回避例に見えるものも 1 拍去声字の上声化を反映しているに過ぎない。

すなわち、岩延本の漢字音は、専図本の傾向に極めて近いと言える。専図本はその奥書から知られるように菅原長成および為長が加点したと考えられるので、菅家の家説を反映していると見てよいだろう。先行研究が指摘するように、岩延本の本文は菅家のものに近い。岩延本がその字音点の面でも専図本と共通する基盤的傾向を持つということは、取りも直さず岩延本の字音点が菅家の家説と関わ



りを持つことを示唆する。一方、岩延本に局所的に現れる濁声点「-o」は、識語にある藤原南家秘本からの移点と考えられ、冒頭に述べた伊藤壽一・鹿嶋正二 1939 の指摘を確認することができた。岩延本と専図本の字音注記のずれの一部は、このように異なる伝本から移点したことによる面もあると推測される。

さて、岩延本の漢字音を全体としてみると、専図本と同様に、呉音読み漢語を交える点、連濁例を交える点、1 拍去声字の上声化を交える点などから、日本語化を経ていることが確認される。その位置づけは加藤大鶴 2022 に述べたとおりであるが、本資料に関わる総括めいた部分を繰り返し述べるのであれば、漢音、呉音の語による読み分けが資料内に存在していることから漢語としての発音が指向され、音調実現に日本語の拍数が影響を与えてはいはするが、日本語アクセント体系に融和しきりような 1 語としての単位的結合までには及んでいない、と言える。

今後は菅家以外の伝本を視野に入れつつ、さらに日本語アクセント体系への融和が進んだ資料の分析も行い、『和漢朗詠集』の鎌倉期写本に観察される漢字音の学問的受容をより立体的に把握することに努めたい。

## 参考文献

- 石山裕慈 2008 「論語古写本における漢字音について」 日本語学論集 4  
 ———— 2009 「醍醐寺本『本朝文粹』の漢字音」 訓点語と訓点資料 122  
 ———— 2011 「『本朝文粹』における漢語声調について」 訓点語と訓点資料 126  
 ———— 2014 「漢音声調における上声・去声間の声調変化：日本漢文の場合」 国文論叢 48
- 伊藤壽一・鹿嶋正二 1939 『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説』 勉誠出版
- 宇都宮啓吾 2011 「訓点資料とその料具」 訓点語と訓点資料 126, 1-17 頁
- 奥村三雄 1952 「字音の連濁について」 国語国文 21-6
- 加藤大鶴 2015 「音韻史を担う漢語アクセント－中低形回避・低起上昇型間の揺れ・原音声調との非対応例を中心に－」 論集 10, 31-64 頁  
 ———— 2019 「漢音漢語における去声 + 去声の接続および後項の「声調」変化：尊経閣文庫蔵『色葉字類抄』（三巻本）を用いて」 論集 15  
 ———— 2022 「蜂須賀家旧蔵専修大学図書館蔵『和漢朗詠集』の漢字音」 跡見学園女子大学文学部紀要 57
- 川口久雄 1965 「『和漢朗詠集』解説」 『日本古典文学大系 73 和漢朗詠集・梁塵秘抄』 岩波書店
- 小林芳規 1967 『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の國語史的研究』 東京大学出版会
- 小松英雄 1956 「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程」 国語学 25
- 佐々木勇 2009 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 研究篇』 汲古書院
- 菅野禮行 1999 「『和漢朗詠集』解説」 『新編日本古典文学全集 19 和漢朗詠集』 小学館
- 西崎亨 1987 「蜂須賀家旧蔵専修大学図書館蔵『和漢朗詠集（菅家相伝本）』の訓点」 武庫川国文 29
- 沼本克明 1973 「漢音の連濁」 国語国文 42-12  
 ———— 1986 『日本漢字音の歴史』 国語学叢書 1 期 10 東京堂出版
- 山本まり子 2017 『平安時代書写和漢朗詠集諸伝本の研究』 お茶の水女子大学附属図書館（E-book サービス）